デート・ア・デット ～Destiny Day～

白犬0525

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは俺と彼女の運命の物語である

目次

出会い　1
約束　10

出会い

目覚めるとそこには何も無かった。真っ暗で音も無い。

いや、耳をすませばトクントクンと音が聞こえてくる。だがそれだけだった。

目を開けていても意味がないからもう一度目を閉じることにした。でもすぐに目を開けることになった、違和感を感じたからだ。

目を開ければ先ほどとは違って光もあり音もあった。私はこの景色や音を知っていた。生まれてきたばかりなのに……

俺は今日死のうと思う。ただ心残りなのは妹を残して死ぬことだ。だがもう疲れたのだ。

疲れた理由は家庭崩壊。いじめ。そんなところだ。

中学の時に俺はいじめにあっていた。もちろん先生に伝えた。だが「この学校でいじめがあるわけないだろ」などと言われた。そんな中父が家を出た。そして高校上がった頃には母が家を出た。俺を残して。妹を残して。

俺が訪れたのは海。正確にいえば崖だ。

身投げをするために俺は崖に近づく。本当にごめんな水無子…ダメな兄ちゃんで…

一歩また一歩と歩くがそれはある大きな音によって遮られた。その音の正体は空間震警報だった。

空間震か…それに巻き込まれたら身投げより楽に死ねるかな…俺の近くで起きないかな…

そんな事を思ったからなのか本当に目の前で時空震が起きたのだ。時空震に巻き込

まれて死ぬということはなかったが。だがそんなことより気になることがある。それは、時空震が起きた中心に人が居たのだ。女の子がいた。さっきまでは居なかったはずなのに。まるで時空震と共に現れたみたいだった。

彼女を見た瞬間、何故だか話しかけなければならないと感じた。

「君は……」

彼女は俺の声が聞こえたのかこちらを振り向く。そしてゆっくりこちらに向かって歩き始めた。彼女がこちらに近づくにつれ彼女の容姿が見えてきた。

小柄で幼い顔立ちだが彼女はとても美しかった。彼女の髪は雪のように白く、夕陽に照らされ光り輝いていた。そんな中でも目立つ紫色の目はじっと自分を見つめていた。

彼女は自分の目の前に来るとポツリと喋った。

「貴方は生きたいの死にたいの？」

何故彼女はそんな事を聞いてきたのか。こんなところにいるからかもしれない。

「でも私には関係ない。少しでも死にたいと思えば…」

そう言うと彼女は右手を前に出した。すると先ほどまでは無かった大きな鎌が現れた。そしてその鎌の先を俺の首に近づけた。

「安心しろ一瞬で死ねる」

彼女の言葉を聞いた瞬間さっきまであった死にたいという感情が一瞬にして消えた。

その瞬間さっきまで無かった恐怖という感情が湧き上がってきた。
「……たくない…」
「……？」
「俺は死にたくないッ！」
俺は心の底に溜め込んでいたのが全て溢れ出た。
「俺は妹を残して死ねないんだッ！」
「……」
「俺は家族を失う辛さを知っているのに…妹にまたその辛さを与えるところだった！俺がいなくなったら寄り添う人がいなくなるのにッ！」
なんで俺は死のうなんて考えてたんだ！あの時水無子に約束しただろ！
『俺は何があってもミナのそばを離れないから…」
『絶対にその約束…忘れないで…家族をもう失いたくない…」
俺は…俺は絶対に死ねないッ！
「死にたいという感情が消えた…」
俺は彼女のおかげで生きる意味を思い出せた。俺は彼女に感謝すべきだろう。命を奪おうとしているものに感謝をするのは変な事だと思うが生きる意味を思い出せたのは彼女のおかげなのだから素直に感謝を伝えたい。

俺は彼女に向かって笑顔で感謝を伝えた。
「ありがとう。俺に生きる意味を思い出させてくれて」
それを聞いた彼女は目を丸くし驚いた表情をしていた。
「何故…感謝をする…」
「素直にそう思ったからだ」
「貴方は…おかしな人だわ」
そう言った彼女は何故か泣いていた。
「なんで泣いているの?」
「私が…泣く?」
彼女は急いで涙を拭うが全然涙が止まらなかった。
そんな何ている彼女に俺はハンカチを渡した。彼女は少し戸惑っていたが恐るおそる受け取った。
「貴方は変わってるわ…命を取ろうとした私に優しくしたり…お礼を言ったりして…」
「そうしたいと思ったからそうしたんだ」
それに彼女からは優しい色が見えた。恐怖の色も見えたが、優しい色の方が強かった。

「その言葉…なんで…」
彼女は何かを言ったの聞き直そうとしたがそれは阻まれてしまった。
彼女に向かって銃弾が撃ち込まれたのだ。
「急いで一般人を保護して！」
「了解！」
誰なんだあいつら!?なんで彼女を攻撃してるんだ！
「やめてくれッ！」
俺の声が届いていないのか攻撃を止めようとしなかった。彼女を攻撃しているうちの一人がこちらに近づいてきた。
「大丈夫ですか。お怪我はありませんか」
「俺なんかどうでもいいッ！今すぐ攻撃をやめてくれッ！」
「それはできまでん」
「なんでッ！」
「あれは精霊です。精霊は倒さないといけないのです」
「倒すって…彼女は何も悪いことはしてないッ！」
「今はしてなくてもいつかするかもしれない。それに現に貴方は襲われそうになっていた」

「それは…」
確かに側から見たら襲われてるようにしか見えないのだろう。でも彼女は…
「生死監視者（アズリエル）」
彼女が何かを言った瞬間。大きな爆発音が聞こえ大きな砂埃が上がった。
そのせいで周りが見えなくなり先ほどまで近くにいた女性も見えなくなった。
だがだんだんと近づいてくる影があった。その影は彼女だった。
「もう一度、ここで待っている」
「それってどういう…！」
俺はその意味を聞こうとするが彼女は飛び去ってしまった。
これが俺と彼女との出会いだった。

俺はその後、ＡＳＴと名乗る部隊に保護され身体検査をした。
「もう大丈夫ですよ。時風　曜架（ときかぜ　ようか）さん」
「はい、お世話になりました。」
こんな時間になってしまった。ミナは心配してるだろうか。早く帰らなくては。
俺はＡＳＴの人に家まで送ってもらった。
「お気をつけて」
「わざわざありがとうございます」
お礼を言ったら送ってくれた女性は笑顔で手を振ってくれた。
ＡＳＴの人達は悪い人ではないのだけど複雑な気持ちだ。
俺はもやもやな気持ちになりながら玄関を開ける。
「ただいま、ミナ」
「あ！お帰りなさいお兄ちゃん！」
俺を出迎えてくれたのは妹の水無子。ニコニコしながら出迎えてくれた。
水無子は人当たりも良く学校でも人気だ。綺麗な黒髪で肩のところで整えている。

そして綺麗な赤い目をしている。背はクラスでは小さい方と言っていた。

「もうお腹ペコペコだよ～」

「分かったわかった。今日は皆の好きなものでいいぞ」

「本当に!?じゃあオムライス！」

「はいはい」

ミナのためにオムライスを作り、ミナと夕食を取っているときあの言葉を思い出していた。

『もう一度、ここで待っている』

何故彼女は待っていると言ったのか、それを確かめるため明日にもう一度あの場所に行ってみよう。

約束

次の晩に俺は昨日来た丘に来ていた。だがそこには昨日の彼女の他に男性がいた。
何かを話しているようだけど遠くて聞こえない。男性の方は必死に何かを伝えようとしている。だが彼女はそれを聞いて険しい表情をしている。
ここは出て止めた方がいいのか…でもすごく出にくい…。
俺がその場でオロオロしていると彼女は大きな鎌を出して男性を攻撃しようとしていた。あまりの出来事に一瞬目を逸らすが大きな音が響いた。
何が起きたのかと急いで振り向くとそこには彼女の攻撃を防いでいた少女がいた。少女は男性を守るように前に立っていて大きな鎌を大きな大剣で防いでいた。
まずい！ここままだと戦いを起こしかねない！
俺は急いで茂みから出ていく。
「お、お待たせッ！」
「「……」」
あ、あれ…なにこの空気は…すごく気まずい！
俺がオロオロしていると彼女は鎌を下ろして俺の方にテクテクとこちらに近づいて

きた。
「ごめん待った？」
「いや、俺の方が後にきたからそのセリフは俺が言うはずなんだけど…」
彼女は「そうなの？」と言いながら首を傾げる。
いけないこんな和んでいる場合じゃなかった。あの二人のことを聞かないと。
「そういえばあの二人は知り合い？」
「違う。私が君を待っていたら急に話しかけてきたの」
「もしかして君たちがこの子のことを知ってるの？」
「え!?…ええっと…」
「私達は今日初めて会うぞ」
「ちょ！十香！そんなこと言ったら怪しまれちゃうよ！」
「わ、私余計なことを言ったのか!?」
な、なんなんだろうこの人達。
「本当役立たずね！私が直接に説明するわ！」
どこからか声が聞こえてきたと思ったら上空に大きな船が現れた。
「な、なんじゃあれ!!」
「こ、琴里!?」

「さっき言った通りよ。あんた達が役立たずだから私が説明しにきたって。まあ、普段はこんなことしないけど…そこの一般時は精霊と知り合いみたいだし」
おそらくあの船から声が聞こえてきたのか。それにしてもなんなんだあの船。
「ちょっと聞こえてるー？」
「ご、ごめん聞いてなかった！」
「貴方じゃなくて隣の精霊の子」
俺じゃなかった…恥ずかしい！
「聞いてない」
「貴方ストレートね…まあいいわ。でも大事な話だから真面目に聞いてちょうだい」
さっきまでとは違って真面目なトーンで話し始めた。
「単刀直入に聞くわ。貴方は人間じゃない精霊よ。そこら辺は理解している？」
「なんとなく」
「そ。それなら話は早いわ。まずはそこにいる士道とデートをしてもらうわ」
「なんでそのでーと？なんてしないといけないの。しかもこいつと」
「こ、こいつ!?」
「士道は黙ってて」
「ご、ごめん…」

「し、士道。大丈夫か？」
「ええっと。なんで士道とデートをするか？だっけ？それはあなたの力を封印するために必要なの。精霊の力は強力だから。細かいことは言えないけど。」
「分かった。なら尚更でーとはしない」
「はあー!?私の話聞いてた!?精霊の力は強力で危ないの！そのために士道とのデートは必要なの！分かって頂戴！」
「なら条件がある」
「条件ってなに内容によったら聞けないかもしれないけど」
「でーとに行く代わりにこの男も連れていく」
え？今俺を連れていくって言った？いやいや!?デートって普通は男女で行くもんだろ!?なんで男二人と女一人でデートって！
「それぐらいならいいわ。むしろその一般人がいれば精神が安定するみたいだし」
「ええ!?いいの!?」
俺と男性の息があった。普通はこの反応だろうからな。
「ま、そう言うわけだから頑張るのよ。士道」
「お、おい！琴里！」
なんかあっちの人も大変だな…

「よろしくお願いします」
彼女はお辞儀をしながらそう言ってその場を立ち去ろうとしていたが俺は彼女に聞きたいことがあったので引き留めた。
「ちょ、ちょっと待って！」
「なに？」
「名前を聞いていいかな…」
「……」
「ご、ごめん！まず自分が名乗らないとね！俺の名前は時風　曜架。よろしく」
「私の…私の名前は…愛美…愛美　生輝（あいみ　せいか）…」
彼女はいや生輝は自分の名前を言いながらキョトンとしていた。なぜキョトンとしていたのか分からないがまあ名前を聞けただけいいか。
「いい名前だね」
それを聞いた彼女は少し嬉しそうな表情をしていた。